
私、親友、好きじゃない

把 多摩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、親友、好きじゃない

【Nコード】

N3152U

【作者名】

把 多摩子

【あらすじ】

私、松長友紀。

小学校四年生になって、数ヶ月。

好きな事、ピアノと雑貨を見たり文房具を買うこと。

嫌いな事、体力を使うこと。

買ってる雑誌は、おまじないのと、お洋服の。

好きな食べ物、ケーキとチョコレート、とにかく甘いもの。

嫌いな食べ物、不味いもの。

好きな人、松下朋玄君。

嫌いな人、怖い人、親友の浅葱ちゃん。

※連載中、DESTINYより番外編です。
別サイトからの転載になります。

私、松長友紀。

小学校四年生になって、数ヶ月。

好きな事、ピアノと雑貨を見たり文房具を買うこと。

嫌いな事、体力を使うこと。

買ってる雑誌は、おまじないのと、お洋服の。

好きな食べ物、ケーキとチョコレート、とにかく甘いもの。

嫌いな食べ物、不味いもの。

好きな人、松下朋玄君。

嫌いな人、怖い人、親友の浅葱ちゃん。

薄幸の美少女、的スタンスで生活中。

私は、自分で言うのもなんだけれど本屋さんに並んでる同世代の雑誌に出ている読者モデルより、可愛いと思う。

何度か応募もしてみたの、一次予選は通過しているの。

でも、それ以上先に進めない。

きつと、大人しくて自己主張が出来ないからなのよね。

もっと人と話するのが得意だったら、表紙を飾るカリスマ小学生になれるのに。

そんな私。

釣り合う友達なんて、あんまりいない。

だって私、男の子達にもてるんだもん。

それで、みんなに敬遠されるんだもん。

苛めにだってあった事あるわ、でも、それは私が美少女だから仕方がないの。

漫画だって、小説だってそうでしょう？

けれど、釣り合う親友も出来たし、私に相応しい人もいて片思い中なの。

それは、ある日の事。

「日曜さ、四人で社会の宿題やらない？」

と、朋玄君が言い出したから私は思わず小さく頷いた。

チャームが鳴って、肩を叩かれたから振り返ったの。そしたら楽しそうな笑顔浮かべて、そう言った。

「げえ、めんどくせー。お前ら三人でやってくれよ、俺嫌だ」

と、私の隣の席の実君が本当に物凄く嫌そうに叫んだから、思わず私は浅葱ちゃんを見る。

「駄目だよ実、班ごとの宿題だからさ、四人揃ってやらないと」

「俺の貴重な日曜をどうする気だ、そんなことに使いたくない」

「三人でやるのは構わないけど、発表の時に実が先生に当てられたらどうするわけ？ 上手く発表出来る自信があるならご自由に」

「……あー、あー！ はいはい、はいはい。わかりましたー、俺も参加しますー。あー！ めんどくせーっ！」

朋玄君と、実君の言い争い。

他の子達が遠巻きに見ているほど、とても緊張感があって怖くて中に入れない。

この二人、あんまり仲が良くないと思う。

朋玄君は、かっこいいし、頭も良くて、勉強も出来る優等生。

密かに憧れている女の子もいること、私知ってる。

私が気になっている男の子でもある、女の子に優しいんだ。

あんまり人と話すこと出来ない私だけど、朋玄君は気遣ってくれるから、好き。

実君は、私はっきり言って苦手。

乱暴だし、言葉遣い悪いし、すぐ人を叩くし……って、私はあんまり接しないから叩かれた事ないけど。

人の悪口も大声で言うし、頭も良くない、髪もぼさぼさ。

けれどそんな二人のおうちは、隣同士。

朋玄君はお金持ちで、大きい家に住んでるみたい。

ある意味、王子様キャラなんだよね、少女漫画のヒーローみたい

な感じ。

で、実君のおうちは新しいけど普通のおうち。

ずっと住んでた朋玄君と違って、実君は引越してきたんだよね。私は、嬉しそうに溜息を吐いて笑った親友の浅葱ちゃんを、見ていた。

浅葱ちゃん。

私の、親友。

スポーツ万能、優等生、お洒落さん、モテ子、ある意味カリスマ美少女小学生。

誰からも好かれて、誰からも羨まれて、誰からも告白されるような、そんな可愛い女の子。

の、好きな男子。

が、その乱暴でガサツで怖くて頭の悪くて、特にかっこよくない実君。

信じられない！

親友の私だけが知っている、浅葱ちゃん秘密。

何処がいいのか私には判らないけれど、とても好きなんだって。

教えて貰ったときは、開いた口が塞がらなくて聞き直した。

だって、不釣り合い。

全然、似合わない。

でも、おかげで私は自分の恋を諦めなくてよかった。

すっごく仲がいいから、浅葱ちゃんも朋玄君が好きだとばかり思っていた。

だから、応援してるの。

実君と浅葱ちゃんがくつつけば、朋玄君を狙いやすいでしょう？朋玄君、多分浅葱ちゃんが好きなんだよね。

でも、浅葱ちゃんが仲の悪い実君と付き合えば、諦めると思うんだ。

とにかく、違って、よかった。

こんな親友と張り合う気なんて、私にはないから。

勝てない、勝てるわけがない。

早く、実君と付き合ってね、浅葱ちゃん。

さっさと告白すればいいのに、全然動かないから、少し嫌い。

可愛いのに、動かないから嫌い。

親友だけど、嫌い。

……だって私、勝てないもの。

でも、一人ぼっちの私に優しく話しかけてきてくれて、話も合うから親友なの。

交換日記もしてるの、だって親友だから。

二人でお菓子を買いに行ったり、お互いの家で雑誌を見たり、服を買いに行ったりするの。

親友だから。

「誰の家でやる？」

椅子を蹴り飛ばして去っていた実君にはお構いなしで、朋玄君は隣の浅葱ちゃんにそう相談した。

私、朋玄君の家がいいな。

行ってみたいな。

自分の家は色々お片付けとか面倒だし、浅葱ちゃんの家はいつも行ってるから。

実君の部屋は汚そうだから、絶対嫌。

朋玄君のおうちは、綺麗そうだし部屋とか見てみたいし。

「俺の家にしようか、言い出したの俺だし」

相変わらず朋玄君は、浅葱ちゃんに話しかけている。

ようやく私を見て、どうかな、と意見を求めてくれたから頷いておいた。

軽く俯いて困ったようにしている浅葱ちゃん、苛々する。

多分、実君の家に行きたいんだと思う。

けど、言っても実君は嫌がるよね。

だから言えないんだ。

浅葱ちゃんは、朋玄君の言葉に、戸惑いながら頷いてた。

……言えばいいのに。

マドンナの言う事なら、男子は誰でも聞いてくれるから。

見ながら思った、私、親友の浅葱ちゃんがやっぱり好きじゃない。親友だけど。

日曜日、浅葱ちゃんの家まで歩いて出掛けた。

そこから実君のおうちへ行く。

そう、朋玄君のおうちで開かれる筈だったのに突然、実君の家になった。

だから、金曜日実君はキレて教室で荒れてた。

隣の席の私は、本当に怖かった。

八つ当たりされる場所だもの、私は小さくなってた。

浅葱ちゃんが、朋玄君に「実君の家に行きたい」、って言ったんだって。

実君に直接言えばよかったのにねー、朋玄君を通して、っていうのが気に入らない。

実君も同じ思いだったんじゃないかな？ 馬鹿ね、浅葱ちゃん。

でも、日曜日に朋玄君に会えるし、男女各二人でデートみたいだから。

私はこの間買って貰ったばかりのワンピースを来て、張り切って出掛けた。

買ってる雑誌に載ってたワンピース、お母さんに無理を言っって買って貰った。

胸元に黒にリボンがついてて、裾が三重のフリルになってる真っ白のワンピース。

それに、黒のニットボレロを羽織って、お気に入りピンクの鞆を持って、頭にリボンをつけた。

行く前に、浅葱ちゃんとケーキを買いに行くの。

ふふ、楽しみ。

「浅葱ちゃん！」

「はーい！ お母さん、行つて来ます」

ドアが開いて、浅葱ちゃんが出てきた。

私を買っているお洋服のお洒落雑誌でモデルをしている子より、可愛い。

胸もあるし、手足もすらつ、としてる。

可愛い服にした私と違って、浅葱ちゃんは大人っぽい服にしたみたい。

白色のレースがついたキャミソールの上に、透けてる黄色の肩が見えるニットを着て、超ミニのデニム のぴったりしたスカートを穿いてる。

鞆は黒の光沢のあるおっきなの、似たような素材の黒で光沢のあるヒールが高いミュールを履いてた。

「おはよう、友紀！ わあ、可愛いワンピースだね、とっても似合う」

眩しいくらいの笑顔でそう言われたけれど、私、急に自分のワンピースが色褪せた。

勝てない。

可愛いハートのネックレスをしてる、大人っぽくて、可愛いんだ。勝てない。

引き立て役にしか、私はなれない。

これだから、嫌いな、浅葱ちゃん。

「そうかな。浅葱ちゃんもとても似合ってるね」

引き攣った笑いになってないよね？ とりあえずそう言ってみる。悔しいけど。

「ありがとう！ このニットね、凄いだよ！ この間500円で売ってたの！ なんかここが少しおかしいんだって」

500円？ とてもそんな値段には見えない。

縫製が汚いんだろうね、浅葱ちゃんはほつれた部分を見せてきたけど、そんなの言われないと分らない。

私の高いブランドのワンピース、急に……嫌いになった。

一緒にお買い物に行くと、浅葱ちゃんは安くて良い物をいつも探し出すし、色々センスが良い。

手を繋いで歩き出そうとした浅葱ちゃんに、私は唇を噛み締めて一言。

だって、だって、このままだと。

「待って、浅葱ちゃん！」

「？」

私は、浅葱ちゃんを呼び止めて立ち止まって、それで。

「ボトム、スカートじゃないほうが可愛いと思う。濃い目のスキニ―持ってるよね」

「そっか。うん、友紀がそう言うならそうだね！　ありがとう。ちよっと変えて来るから、少し上がって待ってて」

「外でいいよ、急がなくていいから着替えておいで。実君に会えるんだから、ね？」

嬉しそうに笑った浅葱ちゃん、私も笑う。

だって。

あんな服装で床に体操座りしたら、パンツが見える。

きつと正面から二人も見たい筈、そうなったら冗談じゃない、私。惨めよね。

阻止しなきゃ、何が何でも。

だから、あのスカートでとても可愛いんだけど、生脚を隠してもらう為にアドバイスしてみた。

それに。

あんな服装で、床に広げた大きなペーパーに書き込みしたら。

パンツが見える。

それで後ろに二人が居たら、撮影会になっちゃう。

冗談じゃない。

こんなに可愛いワンピースを着て来たのに、あんなB級品の服に負けるなんて、プライドが許さない。

何より、実君はどうでもいいけど、朋玄君が。

あんなカッコしてたら女でも目が行くわよっ、チッ！

私は、浅葱ちゃんよりも、可愛い立場で居なければならぬの。お淑やかで、病弱なちよっと存在感のない、不思議な美少女。

……というスタンスを、維持しなければいけないの。

そうして浅葱ちゃんはデニムスキニーに履き替えて出てきた、二人でケーキを買って実君の家へ。

歩きながら、思ったんだけど……。

それはそれで。

なんだかとても脚のラインが綺麗で、大人っぽく見えて、ムカついた。

けど、今日、女の子らしい、男受けする服装なのは私。

このワンピースだって”男の子受けする、ゲキかわワンピース、ベスト10”のなんだから！

どっちかっていうと、浅葱ちゃんの服装は”友達受けする、クルコーデ、ベスト10”って感じ。

勝った。

私は、勝った。

勝ったけど、勝った筈だけど。

「うおおおお、ホントに浅葱ちゃん来たー！」

玄関に、男子がずらりと並んでいた実君の家。

驚いて浅葱ちゃんと後ずさったら、朋玄君が飛び出てきた。

「兄貴、帰れよ！ 勉強するんだ」

「高校生の兄が、勉強くらい教えてやるよ。あ、浅葱ちゃん初めまして、朋玄の兄の松下朱理です。男子校に通っています、あ、これ友達です」

浅葱ちゃんは、差し伸べられたのでとりあえず握手を交わしている。

朋玄君の、お兄さん？

高校生なんだ、目元と眉が似てるかな、大人っぽい。

「浅葱、友紀、こっち、こっち！」

朋玄君が私達の手を掴んで、実君の家の中へと連れて行ってくれた。

玄関からは文句を言う声が聴こえてたけど、鍵まで閉めて朋玄君は引き攣った笑みを浮かべる。

「ごめんな、兄貴にバレてさ。あの人達、浅葱のファンクラブ会員らしいんだ。待ち伏せしてたんだよね」

ファンクラブ。

暇な高校生、きっとモテない男達の集団ね。

浅葱ちゃんがどういう反応をしているのか気になったから、軽く見てみたら。

それどころではないみたい。

実君の家の玄関に居るのだから、浅葱ちゃんにとって外の人達はどうでもいいんだ。

玄関に無造作に置かれている、実君の汚いスニーカーを見て、嬉しそうに笑ったり。

狭いしお世辞にも綺麗と言えない家を見渡して、頬を初めたり。

私には、さっぱり分からない。

それで、肝心の実君は、といえば。

ドスドス、と廊下が軋んでようやく頭を掻きながらよれよれのTシャツにジーパン姿で登場した。

機嫌悪そう、怖い。

「おい、朋玄！ 外の集団何だよ！？ 警察呼ぶぞ、コラ」

呼んでも良いと思うよ、私。

自分の家に知らない男達が屯っていたら、絶対私警察呼ぶわ。

「浅葱ファンクラブの兄貴を筆頭とする高校生の集団。放置でよいよ」

「ちっ、これだから」

実君は、一瞬浅葱ちゃんを見た。

私、前から思ってたんだけど。

実君、浅葱ちゃんのこと嫌い？

それは困る、実君に浅葱ちゃんが振られたら、朋玄君が慰めに入る。

そしたら、くつついちゃう！

実君は、凄く機嫌が悪そうで、そつと浅葱ちゃんはケーキを差し出した。

とりあえず、ケーキを四人で食べてから研究文を書く事になった。実君は、市販の大きなペットボトルから必死にコップ四つに、紅茶を入れてくれた。

四人で、ケーキを食べる。

「あつま！ あつま！ おまえら、いつもこんな甘いもん、食ってるのか！？ 信じられねえ、俺甘いの駄目なんだよ」

「ご、ごめんなさい。えーっと、えと。わ、私のケーキのほうが甘くないかもしれないから、交換を」

二口くらい食べて、実君はお皿に派手にフォークを置く。

甘いみたい、そう？

味覚が変なんじゃないの？

浅葱ちゃんはうろたえて、何を思ったのか自分の食べていたケーキを差し出した。

赤面して実君それを拒否、まあ、そうだよな。

直接口をつけてないけど、浅葱ちゃんが食べてたケーキだものね。普通は恥ずかしいよね。

「気にしないでいいよ、浅葱。実は辛党なんだ。でも、そのケーキ美味しそうだから少し貰ってもいい？」

浅葱ちゃんの隣に居た朋玄君は、氣遣ってか浅葱ちゃんのケーキを食べる。

啞然、と私も実君も見てた。

朋玄君は、さり気無い気配りが出来る、優しい男の子で。

まれにキザだけど、そこが良いって、子も居る。

今日も清潔そうな真っ白のポロシャツに、ジーパンだけどベルトがとてもお洒落。

髪もさらさら、実君とは全然違う。

駄目よ、浅葱ちゃん。

実君から朋玄君に心変わりしたら、許さないんだから！

何処からどう見ても、朋玄君のほうがイケメン。

浅葱ちゃんは、趣味が悪いのだと思うの、男のね。

「その服、可愛いね」

朋玄君のその声に、コップを潰す勢いだった私は瞳を輝かせて顔を上げた。

けど、その言葉の相手は私ではなく。

「この黄色いの？ 500円なの」

浅葱ちゃんだった。

嬉しそうに、500円の服の自慢を始める浅葱ちゃん。

言わなきゃいいのに、ね。

お金持ちなんだし、そんな安い服の自慢をしなくても、って私思うの。

それなら私、この服19,800円なんだけど。

「500円？ 見えないね」

「あのね、ほら、あそこの大通りの」

「えーっと、ああ、あの辺りにあるお店なんだ？」

500円の服で、楽しそうに会話が弾む二人を、私は眺めていた。

実君は渋々ケーキを完食、漫画を読んでいる。

……帰りたくなった。

ケーキを食べ終わってようやく、今日集まった目的を開始。

社会の授業で、班毎に研究文を発表する。

大きな紙を貰って、そこに絵を描いたり、文を書いたり。

黒板に貼って、説明をするの。

テーマは、“近々出来る河口堰”について。

河口堰によって引き起こされるであろう、良い事・悪い事を発表するのね。

実君の機嫌は悪くなる一方だし、朋玄君は浅葱ちゃんに付き切りだし。

浅葱ちゃん、早く実君のご機嫌をとってよ。

私が、朋玄君と会話出来ない。

折角会えたのに、意味がない。

苛々する。

思わず手にしていたマジックを、強く握り締めて、俯いて齒軋り。悔しい。

だから、私、親友の浅葱ちゃんが、嫌い、です。なら。

どうして一緒に居るのかって？

そんなの、決まってるじゃない。

『いつか、見返してやるため』よ。

勝とう、なんて思っていないわ。

引き立て役になって、ならないわ。

『上手く、利用する』のよ。

浅葱ちゃんが、実君と付き合えば。

朋玄君は私が絶対に、手に入れるの。

そしたらね、一般的にお似合いなのはどっちだと思う？

私と朋玄君よね、浅葱ちゃんと実君じゃ、不釣り合いなの。

私はそこで、優越感に浸れるわ。

誰も傷つかないけど、私は癒される。

今までの苦勞が、報われる。

とても、楽しみなの。

私、その時を待っているの。

想像してみて、浅葱ちゃんと実君が二人で歩いてたらきつと周囲はこう言うわ。

「あの女の子、可愛いけど趣味が悪いよね」
って。

私。

それが楽しみで仕方ないの。

そしてね、私と朋玄君を見てね、周囲はこう言うの。

「あら、可愛らしい恋人達ね」

って。

私。

それも楽しみで仕方ないの。

だからね、早く浅葱ちゃん。

実君とくつついてね、お願いよ。

その為になら私、断然協力してあげるんだから！

ああでも、実君は浅葱ちゃんが嫌いみたい。

こっぴどく振られている姿も見てみたいけれど、ああ、それも見たいけれど！

実君を抜いたほぼ三人で完成させた、その課題。

夕方、お別れをして私は帰宅した。

今日は外食だとお母さんが言うので、お気に入りのワンピースをそのまま来て家族行きつけの和食屋さんへ。

その後、お父さんに頼んで本屋さんに寄って貰う。

今日は、私が毎号買っている、おまじないの雑誌の発売日。

ティーンズ雑誌置き場へ真っ直ぐ向かって、迷うことなくそれを手にした。

ふと、隣に雑誌を大量に抱えた女の人が立っている。

高校生？ 中学生？

着ている服は、私が大好きなブランド達、背も同じくらい。

その人は、何かぶつぶつ言いながら次から次へと雑誌を手にとって何かを探してた。

何してんの？

私は好きなアイドルの情報を見ようと思って、おまじないの本を抱えて、とあるアイドル雑誌を読み始める。

買っちゃおうかな、かつこいー。

朋玄君も、こういうのに応募したら良い線行くと思うんだけど、
なっ。

今度、推薦しちゃうかな。

そしたら、それで会話出来るし。

あ、でも、朋玄君が上の方まで行ったら、アイドルが彼氏になる
のかな？

それはそれで、楽しいよね。

素敵、アイドルとの秘密の恋。

ファンにもナイショだけど、忙しくても朋玄君なら必ず私の元へ
帰ってくるわ。

スリルがあって、わくわくしちゃう。

コンサートはいつもアリーナで、もしかしたら私もアイドルデビ
ューとかしちやえるかもしれないし！

他のかつこいーアイドルの男の子たちとも会えちゃう！ やーん、
どーしよーっ！

「嫌いなら、嫌いだと言ってみればいいのに」

ふと、そんな声が聴こえた。

思わず顔をあげると、さっきの雑誌を大量に抱えた人が喋ったみ
たい。

誰に話してるの？ 気持ち悪い。

無視。

大きい独り言、止めて欲しい。

「後悔しないのなら、良いけれど。でも、私は貴女が好きじゃない」
？

煩い独り言、こわーい。

私は、思い切り睨みつけて、離れて雑誌をまた読み始める。

「貴女は、満足してたけれど。でも、多くのものを失ったよ。言っ
てみればいいのに、嫌いだって」

なんなの、この人。

雑誌に目を落としたまま、喋り続けるこの女。

私は、雑誌を丁寧に棚に戻すと鼻で笑って睨みつけて、レジへ向かった。

「奈留ー！ まだ雑誌見てたわけ？ 早く買いなよ」

「ちょっと待って、綾ちゃんっ！ えーっと、情報によると今月出ている雑誌はあと一冊あるわけで」

「買いすぎ」

私の脇を、ストレートロングの長身のお姉さんが通り抜けて、あの独り言女に話しかけている。

奈留、という名前らしい。

憶えてやった。

睨みつけたら、奈留とかいう女は、ようやく私を見て。

「忠告は、してみたよ」

と、真顔で言ってきたから、私。

思わず手にしていたおまじないの雑誌を、爪を立てて握り締めた。何、あの女。

私に言っていたの？ 何様のつもりなの？

頭悪そう、馬鹿みたい。

最悪。

苛々する。

今日は、本当に、良い事がない。

早く、家に帰って雑誌を読まなくちゃ。

みずがめ座は、今月の運勢どんな感じかな？

帰宅後、それでも私は自慢の可愛い部屋で雑誌を読み更けていても苛々していた。

あの奈留って女の声が、こだましてる。

うるさい、うるさい、うるさい。

誰にも、迷惑かけてないわ。

私、何か悪い事してる？

してないと思う、大丈夫。

私にだって、自分を主張する権利はあると思う。

本当は、嫌いだったの、ずっと。

だから、何だっていうの？

私一人くらい、嫌いでも罰は当たらないわ。

そう思うでしょ？

(後書き)

http://ncode.syosetu.com/n1747
u
本編へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3152u/>

私、親友、好きじゃない

2011年6月26日10時40分発行